『赤い鳥』に関する研究

――大正期日本創作児童文学の一側面として――

王　瑜

はじめに

今日まで発表されている大多数の日本児童文学史の中で、日本創作児童文学は、一八九一（明治二十四）年に発表された巌谷小波の『こがね丸』からスタートし、一九一八（大七）年鈴木三重吉主宰で創刊された児童文芸雑誌『赤い鳥』[1]によって、御伽噺から芸術的な近代児童文学への転回が成し遂げられ、大正期児童文学を代表する創作童話童謡の隆盛期を迎えたと、ほぼ定説のように書かれている。[2]こうした各時代の児童文学の特質をおさえてゆく中で、その時代を特徴づける代表的な文学者と作品を並べながら評価するというパターンには一定の合理性があるにしても、やはり次のような問題点がある。

第一に、本来児童文学とは子どもの読者が読むことによって完成される世界であるため、偏に大人の価値基準のみで、作家の創作活動とその作品を注視するわけにはいかない。評価の視座は大人に偏って、読み手である子どもによる「読まれ方」を考察することがなければ、不完全な結論になる可能性が大きい。

第二に、児童文学史の叙述の対象が、すでに完結した過去の時代の作家と作品に限定されるのは当然のことであるが、その時代の文学が発展する時に見えない傾向や、次の時代の作品に与えた影響は、歴史の流れにつれて次第に明白になるため、文学史家が先見的に前後の因果関係を配慮しつつ、歴史事実を新たに組み立て直す（過大過小評価したり、選別したり、抹殺したりする）ことができる。更に、歴史的・政治的なタブーの要素をも含めて考えると、これまでにその時代の特徴として認められてきた作品は本当にその時代の主流と言えるのか、それらの作品について、再検証する必要があるの

ではないか、という疑問が生じてくるわけである。

以上の二点を踏まえ、本稿においては、大正時代の代表的な児童文芸雑誌であった『赤い鳥』を例として、児童文学史で高く評価されている日本創作児童文学の「古典的名作」の実態を究明することを目的とする。具体的には第一の点については、『赤い鳥』の読者投書欄を手がかりとして、それは一体どのような読者層を持っていたのか、また、視座を子ども読者に据え、作品が生まれた大正時代の言語空間でどのように読まれていたのか、ということについて考察したい。第二の点については、作品の例に即して、同時代の大衆児童文学との比較を通じて、『赤い鳥』が大正期児童文学の代表に位置づけられた理由を究明したい。

一　何故『赤い鳥』か

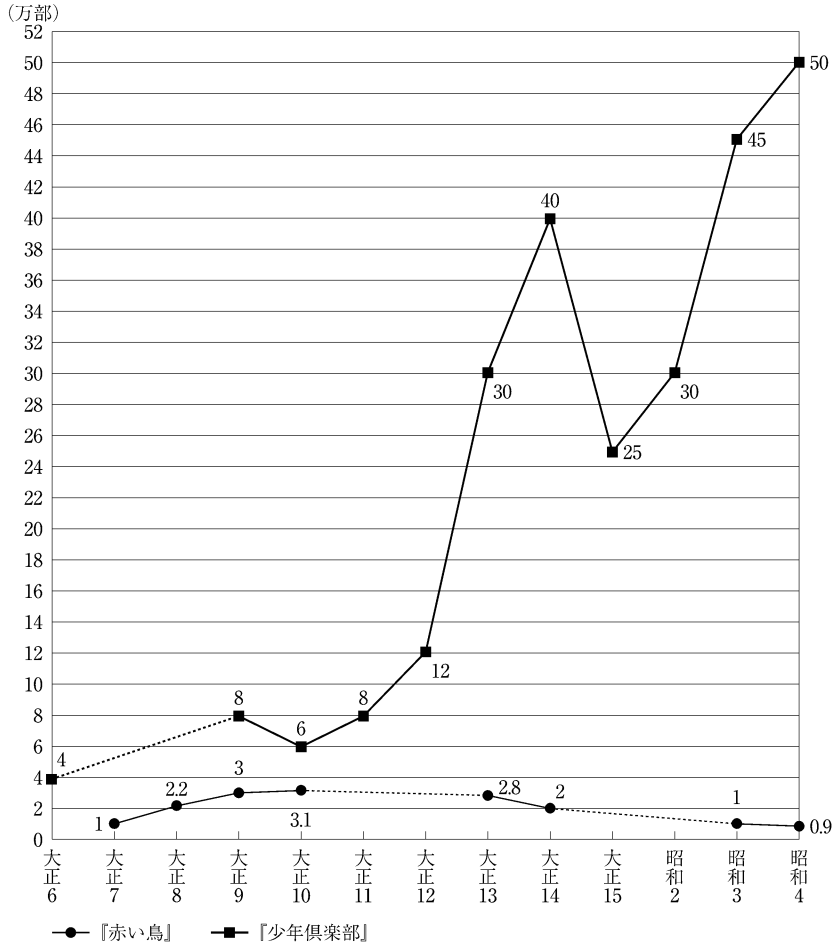
本稿で『赤い鳥』を取り上げる理由は、『赤い鳥』に向けられた高い評価③と当時の実際の発行部数には大きな隔たりがあるからである。

もう少し詳しく言うならば、今日発表されている大多数の日本児童文学史と日本児童文学名作集で、大正期の児童文学は、『赤い鳥』に代表される童話童謡の時代と一般に扱われている④。しかし、当時の発行部数を考察してみると、『赤い鳥』最盛期の一九二〇（大九）年頃の発行部数が三万程度であったのに対して、大正三年に創刊された講談社の『少年倶楽部』は当初三万部、六年に四万部であったものが、一九二二（大十一）年の新年号においては、それまでの発行部数の二倍にあたる八万部になっていた。両者の全発行部数を比べてみれば、言うまでもなく後者が圧倒的であった（図1参照）。この事実について、現在までの研究では、その理由を雑誌出版社の宣伝販売方式という外部の要因に求めるか、もしくは、『赤い鳥』の作品が「余りにも高く、芸術的香り、文芸的感覚も、時代に先行しすぎていた」（日本児童文芸家協会編『児童文学の展望』角川書店、一九五六年）と説明するなど、読者の受容のあり方、つまり「誰が、どのように読んでいたか」に関しては、あまり考慮されていなかったのである。

二　読者投書欄から見る『赤い鳥』の読者層

『赤い鳥』の読者投書欄は、創刊からほとんど巻末に掲載され、『赤い鳥』終刊に至るまで設けられていたものの、刊行途中に名称の変更、付加などが見られる（表1参照）。

そして、この読者投書欄は、『赤い鳥』第一巻第一号の読者投書欄の冒頭「直接購読者諸君のために設けました。どうか、子供に関してのさま〴〵な御意見や、みなさんのお子さま方の、御成長の課（ママ）



【図１】『赤い鳥』と『少年倶楽部』の発行部数

＊　『赤い鳥』の発行部数は『鈴木三重吉全集』第六巻の書簡より、『少年倶楽部』は『講談社の歩んだ五十年』『少年倶楽部の時代』より作成

＊　概数にて表示

＊　破線部は部数不明の期間を示す

【表1】『赤い鳥』読者投書欄名称変遷表
一九一八（大七）年七月～一九二九（昭四）年三月

名称	巻号数	掲載期間
「通信」	第一巻第一号～第一巻第六号	大正七年七月～大正七年十二月
	第三巻第五号～第四巻第四号	大正八年十一月～大正九年四月
	第五巻第四号～第十五巻第六号	大正九年十月～大正十四年十二月
	第十九巻第二号～第二十二巻第三号	昭和二年八月～昭和四年三月
「少年少女」「通信」	第二巻第一号～第三巻第四号	大正八年一月～大正八年十月
名称無	第四巻第五号～第五巻第三号	大正九年五月～大正九年九月
「談話」	第十六巻第一号～第十八巻第四号	大正十五年一月～昭和二年四月
「講話」「通信」	第十八巻第五号～第十九巻第一号	昭和二年五月～昭和二年七月

程を記念し得る出来事や、皆さんのお互の御交際や『赤い鳥』に対する御批評や御要求なぞ、すべての方面に自由にお使ひ下さいまし。私どもも、みなさんへ申し上げるお話は、この欄でいたします。」とあるように、読者と編集側及び読者同士の交流を促すために設けられていた。ここで注目したいのは、大正八年一月第二巻第一号から十月第三巻第四号までの十冊に「少年少女」という欄を設け、子ども読者からの投書を一般の投書と区別して掲載していたが、これ以外の百十七冊の投書欄では、大人読者から寄せられたものが大多数を占めているという点である。例えば、第一巻全六号を調べた結果、読者側からの投書は八十一件あったが、文面と最後に書かれている所属から、その殆どは学校の教師や子どもの親から寄せられたもので、子どもからの投書はわずか四件しかなかった。つまり、投書から判断できるのは、『赤い鳥』の読者は児童文学の享受者である子ども以外に、教育的指導者としての学校の教師と、子どもの本の選び手となる親などの大人が大きな比重を占めていたということである。

三　『赤い鳥』の読者の享受相

三―(1)　教育を向上するための読書――『赤い鳥』の大人読者

第一次世界大戦後の大正デモクラシー高揚の一翼として、自由教育運動が盛んにありつつあった。自由教育運動と一口にいっても、その主義・主張は多種多様である。[5] それを一々こまかく述べる余裕はないが、一言でいうと、「国家のための教育から解放し、人間としての教育を確立するため」（猪熊葉子他編『講座日本児童文学4　日本児童文学史の展開』明治書院、一九七三年）、「絶対主義・官僚主義・教育体制の主知的形式的教育に対して、自由主義・児童中心主義の教育思潮に立つ個性・創造性尊重の教育」（日本児童文学学

会『赤い鳥研究』小峰書店、一九六五年）を提唱する運動である。この運動の一環として、文芸教育及び芸術教育も主張されていた。

遠藤早泉は『現今少年読物の研究と批判』（開発社、一九二二年）の中で、大正十年の夏に、比叡山延暦寺で開かれた国民教育奨励の第四回全国小学校教員大会に於ける「教育と文芸との調和」に関する議題とその回答の大要を紹介している。議題の第一は、「文芸就中小説の教育に與ふる悪影響と思はるゝ点如何」というものである。これに対して種々の回答があり、その中に次の意見がある。「児童はいかゞはしい豆本や、児雷也とか猿飛佐助とかいふ忍術物を好んで読む。それが児童本然の趣味の要求だから、其の要求が満足されなければ止まらない。そこで其の救治法は悪いものを止めるよりは、寧ろ進んで読本以外の適当なる読物を提供して児童の興味欲を満足させ、高尚なる趣味性を発揮させるのが第一である」。このように、当時子どもの中に流行していた忍術物などを否定し、高尚な読物を提供すべきだと主張する教育者がいた。

第二の議題「現行教科書に於ける文芸資料の多少、良否等に関する所見如何」に対しては、「文芸資料乏しく、理知的、実用的、道徳的教材が多過ぎるが故に、一層其の分量を多くすべきである」と結論付けられた。議題の三は、「高尚なる趣味を養成する実際上の方法及び其他に就いての方法如何」というものであった。これに対しては「先づ教員其人の芸術趣味を養ふ為めに師範教育を改善するを可とする」という意見で一致した。これは最も根本的な解決方法であって、一方、児童に対しては、「豆本を駆逐する為に適当なる科外（ママ）読物を選択して之を成る可く充分に供給すること」、「史譚、神話、逸話、童話等を豊富に聞かせること」などのような方法を採るべきものと答えている。議題の四においては、文芸と教育との調和に対する一般的方法が列挙されているが、「全国民共通の元気ある俗謡又は興味ある教育的童謡、童話等を作ること」「児童に適したる高尚で興味のある読物を盛に出版すること」という意見に注目すべきであろう。

『赤い鳥』が提唱した「芸術として真価ある作品」を創作する主張は、まさに、当時の教育の場における芸術性のある教育を求めようとする動きと合致していたため、『赤い鳥』の作品は当時の学校の教師に歓迎されたのであろう。投書欄には、『赤い鳥』が教育の場で教師にとって役に立った、是認されたということを書いている投書がある。「『赤い鳥』は子供の為にもなり、私たち教員に取つても非常に参考になります。」（富山県中新川郡東水橋町、加賀谷良二、第一巻第四号）や、「私どもの学校では、最近職員会議の結果、『赤い鳥』を児童一般に愛読させることになりました。生徒の数は八百人からあります。」（和歌山県加太町小学校、川崎亀楠、第一巻第六

号）、「私の組の児童七人のうち、三人は『赤い鳥』の愛読者になりました。学校の図書部でも『赤い鳥』を買つて生徒に見せてをります。」（日本メリヂスト横浜教会日曜学校、小笠原賢三、第二巻第六号）などがそうである。

教育のもう一つの場としての家庭においても、子どもの教育に熱心な親は『赤い鳥』を購入し、自分が読んだり、子どもに読み聞かせたりしたことも多かったのである。例えば、「『赤い鳥』は大人自身が読み、大人が子供に読んでやるには申分のない雑誌ですが、小さな子が一人で読むにはむづかし過ぎます。子供に読める欄を設けて下さい。」（本郷、船橋生、第一巻第二号）や、「私は十歳になる女の子を内地に残して一人当地にまゐつてゐます。今まで子供に色々な雑誌を読ませてゐましたが寧ろその選定に労れてゐる程でした。私はこの度『赤い鳥』を手にして、私が疾くから探してゐたものに始めてぶつかつたやうな気がしました。」（台湾鳳山海車無線電信所、山岸久二、第一巻第三号）、「私は子供にお話をする参考書に困つてをりましたが、人から『赤い鳥』を推奨されてこんなよい雑誌をなぜもつと早く気が付かなかつたらうと後悔致しました。諸先生の御尽力を感謝致します。」（大阪府東成郡、安藤富子、第二巻第六号）といったようにである。

画一的で型にはめたような教育のスタイルから、子どもの関心や感動を中心に、より自由性と芸術性のある新教育を目指そうとする教育運動が盛んになった時代背景があり、学校の教師や、子どもの親達は、教育を向上するため、『赤い鳥』を参考書として購読していたのだ。

三―(2)　大人の教育意識による子どもの読書

以上述べてきたように、『赤い鳥』を購読する子供の教育者としての学校の教師と子どもの親は、自分も読むが、子どもにも読み聞かせたり、読ませたりもしていた。子どもの投書には、「お父さまは『赤い鳥』ならいつ読んでゐてもお叱りになりません。」（芝愛宕小学校六年生、鎌田敬子、第三巻第一号）、「私は『赤い鳥』の第一号からの愛読者です。それは東京の兄さんが、これは為めになるよい本だからと言つて、毎月送つて下さつたからです。兄さんは今後も毎月送つてやると言ひました。」（福島県東白川郡石井小学校、尋六、松田良隆、第二巻第六号）という、それを裏づける内容が見られる。

こうした事情は、大正期に子ども時代を過ごした人々の回想の中にも見られる。赤い鳥の会編『「赤い鳥」と鈴木三重吉』（小峰書店、一九八二年）の「子どもの頃、そして『赤い鳥』」という座談会（水藤春夫、柴野民三、関英雄、与田準一、福井研介）で、福井氏

が『赤い鳥』と出会ったきっかけについて、「ぼくが赤磐の小学校に通ってた頃にね、師範学校を出たばかりの新任の先生がやってきたわけですよ。その人が『赤い鳥』を購読していたんですが、自分で読み終わると、それをぼくたち子どもにくれたんですよ。ぼくはそれまで『少年世界』とか『日本少年』なんかを読んでましたから、『赤い鳥』をみて何だか変わった雑誌だなと、その頃は思っていました。」と語っている。

当時は、「雑誌は俗悪なもの」「読んでも得るところのない無駄なもの」というのが一般の認識であったため、教師と親に勧められる雑誌はめったにないものである。次の滑川道夫氏の話から当時の状況が窺われる。

冨田　今回は小学生時代の、年代にすると大正二年（一九一三年）から大正九年（一九二〇年）ごろまでのお話を伺いたいと思います。

（略）

滑川　（略）これ（『立川文庫』…筆者注）を読むことは学校でも禁じられていたし、家でも読ませなかった。隠れて読むわけ。枕の下に隠しておいて、布団のなかに入ってこっそり読む。

冨田　隠して読むには、この大きさ—文庫本よりちょっと小さいぐらいの—はよかったでしょう。

滑川　そう。学校へも隠して持って行く。雪国だから冬はもんぺをはくだんだけど。もんぺをはくとき、着物をたくし上げて帯に挟むわけね。おしりの上がポケットみたいになるわけだ。寒いときにはそこに手を突っ込む。ここに隠していく。たいへん都合がいいんだよ。

（「滑川道夫の語る〈体験的児童文化史〉第二回『立川文庫』の時代」、「教育」一九八八年、五月）

学校と家で禁じられても、『立川文庫』を貸し借りしたり、こそこそ読んだりするのに対して、『赤い鳥』は、大多数の子どもにとっては、あまり面白くない雑誌であったようである。関英雄氏は『赤い鳥』との出会いを次のように語った。

その『赤い鳥』を、初めて知ったのは、五年生の頃だったと思う。ある日、二階の下宿人の早大生中井さんが、「英雄ちゃん、こういう雑誌もたまに読むといいよ」といって、ポンと投げ出すようにわたしの目の前に置いたのが、何月号だかの新刊の『赤い鳥』だった。ゴタゴタした編集で頁も厚い少年雑誌を

見なれた目には、それは頁もうすく、〝読みでのない雑誌〟という第一印象を受けた。しかし、表紙からして他の娯楽雑誌とまったく異なる高い品位と清々しい感じがあらわれていて、紙質もいいのか雑誌全体が何か菊の花の白さを思わせた。わたしは貴重品をもらったと思ったが、その号の内容を何も憶えていない。美しい雑誌という思いと、あまりおもしろいと思わなかった両方の感じが共に残った。

（関英雄『体験的児童文学史　前編』理論社、一九八四年、七月）

以上のように、『赤い鳥』の子ども読者の読書行為には、教育者としての学校の教師と親の教育意識の影が色濃くあらわれ、子ども自身には自発的に読む情熱があまりなかったということが明らかであろう。

ところで、親の教育意識の問題と関わっているが、『赤い鳥』の子どもの読者はもう一つの特徴を持っている。結論を先に述べると、『赤い鳥』を支持する子どもは、所謂新中間層[6]の家庭の子どもが多いのである。

長野県飯田市の開業医の息子であった古島敏雄は、「私は当時出はじめた『赤い鳥』をとってもらっていた。友人は『童話』という雑誌をとっており、毎月それらを交換して読んでいた。（略）子供が雑誌を月極でとり、あるいは家に子供向の本があり、本を中心に友人の家で遊ぶような人は、私の組では新聞記者の家だけだった」と書いている（『子供たちの大正時代――田舎町の生活誌』平凡社、一九八二年）。

政治家鶴見祐輔の長男であった鶴見俊輔の場合は昭和に入ってからのことになろうが、「子供のころ、私は何度か、『赤い鳥』という雑誌を見たことがあった。よい雑誌だとすすめられたし、親からも読むようにいわれたが、私は、いつも悪いほうの本に心がしぜんにむき、『赤い鳥』などの良書を読むことがなかった。『赤い鳥』の仕事に関心がむくようになったのは、もう小学校を終えてから主宰者の鈴木三重吉が『綴方読本』にそれまでの『赤い鳥』の子供の作文をまとめて選評を書いたものを読んでからであった」といっている（『私の地平線の上に』筑摩書房、一九九一年）。

『赤い鳥』は特に新中間層の家庭の子どもに受容され、より多くの家庭の子どもの間に流通することはなかった理由について、もちろん価格の問題[7]がまず考えられるが、新中間層の家庭は、経済的な面で、子どもの教育費に比較的余裕があるのみならず、「文化生活」を重視し、子ども教育に強い関心をよせ、学校教育を補完するものとして家庭教育の意義を積極的に認めようになった。当時一流の作

家を集め、真の子どものための文学を作り出すと宣言する『赤い鳥』は、まさに、このような家庭の親の要望に応えたのであろう。

以上のように、『赤い鳥』が学校と家庭という教育の場で是認され、教師と親の勧めで受動的に読むことになった子どもは多かったのである。それに、『赤い鳥』の子ども読者の範囲はそれほど広くないもので、家庭教育を重視し、教育費にも余裕がある新中間層の家庭の子どもが主である。もちろん、田舎の子どもたち、ハイクラスの家庭の子どもたちは、『赤い鳥』と全く無縁であるわけではないが、『赤い鳥』を購読した子どもに、新中間層の家庭の子どもが多かったことは、『赤い鳥』の読者享受層の特徴の一つだと言えよう。

四　大正期児童文学の代表と位置づけられた理由は何か

以上の考察から、当時においては、『赤い鳥』は決して幅広い子ども読者を持ち、人気があった雑誌とは言えなかったことが分かる。しかし、なぜ今日になって、大正期の児童文学イコール童話童謡、童話童謡イコール『赤い鳥』という見方が通念になったのだろうか。

創刊にあたって、全国に配布したプリントに鈴木三重吉は「西洋人とちがつて、われ〳〵日本人は哀れにも未だ嘗て、たゞの一人も子供のための芸術家を持つたことがありません。」と現状を嘆き、「われ〳〵の子供のためには、立派な読物を作つてやり」たいと、決意を表明した。鈴木三重吉にとって、西洋は日本の現状を打開し、日本の子どもの文学の質を高める手本のような存在である。そして、彼の考えでは、「芸術として真価ある純麗な童話と童謡」を生み出すためには、新たに創作されなければならない。その「創作」の担い手を文壇の「権威ある名家」に求めた[8]。

しかし、小説の名家は、かならずしも子どもたちのために優れた児童文学も簡単に創作できる者とは限らない。第一次の『赤い鳥』には、有島武郎の「一房の葡萄」、菊池寛の「納豆合戦」などの創作童話は確かに見られるが、実際には西洋の児童文学や民話などを素材として書かれた作品も多いのである。

また、児童文学に対する理解は作家によってそれぞれ違うだけではなく、主宰者鈴木三重吉の「子どものため」という意識がどれほど執筆者側に伝わっていたかも疑問である。大正十年、『早稲田文学』六月号に載せられていた「童話及童話劇についての感想」という特集[9]に、小川未明はこう書いている。

「私が童話を書く時の心持」

「童話」といふ言葉は、かの「おとぎばなし」といふ言葉の

やうに、子供のために文学と、やゝもすれば解せられるやうでありますけれど、私自身は独り子供のために語るのでなく、其れに対して、一つの主張を持つてゐるのであります。

子供の心をなほ忘れずにゐる、すべての人々に向つて、作者である私が、また子供の心持に立ち帰つて、ある感激を訴へるといふことに、このことは過ぎないのである。

（略）

この意味からして、私は、「童話」なるものを独り子供のためのものとは限らない。そして、子供の心を失はない、すべての人類に向つての文学であると主張するものです。

小川未明らが作品を書き、『赤い鳥』に掲載していたが、彼らにとって童話童謡は、現実に存在する子ども読者のために創作するものというより、芸術表現として「子供の心を失はない、すべての人類」のために創作するものである。

しかしながら、完全な創作ができず、西洋のものを手本として書かれたものにせよ、大人が失っている純粋無垢な童心を賛美するために書かれたものにせよ、『赤い鳥』の多くの作品は、勧善懲悪、立身出世を説くものではなく、平等、友愛、寛容のモラルを表現するところで共通している。

作品に即してみると、例えば、「大将の子と巡査の子」（大正七年十月）は、「陸軍大将の子武雄と、巡査の子丑松は、どちらの父親が偉いかで言い争い、二人とも自分の父のほうが偉いといって譲らず、喧嘩になりかける。二人が帰宅してそれぞれ自分の父親に尋ねると、武雄の父は巡査が偉いと言い、丑松の父は陸軍大将が偉いと答えた。子どもたちはがっかりするが、学校で会うと互いに謝り合う。しかし、今度はまたそのことで譲らず、先生に聞いた。先生は、偉い陸軍大将もあれば、偉い巡査もあるように、また偉くない大将も偉くない巡査もあり、誰でも自分のたったひとりの父親、母親がその子どもにとって一番偉いと教えた。子どもたちようやく納得した。」という階級、職業に問わず、平等精神を子ども読者に伝えようとする作品である。

その他、『赤い鳥』の代表作の一つと認められている有島武郎の「一房の葡萄」（大正九年八月）も、友愛、寛容の精神が溢れている作品である。

一方、『赤い鳥』以外の児童雑誌の場合はどうだったのであろう。『立川文庫』について、後に社会学者、評論家になった清水幾太郎はこう語っている。

立川文庫は所謂袖珍美本、一冊十銭位、大阪で出版されてゐ

たと思ふ。何れも、英雄、豪傑、侠客、軍人などを主人公とする立志、出世、仇討の物語である。一冊二冊と読み進むうちに、私は忽ち立川文庫の擒となつてしまつた。一冊は一晩で読める。昨日も一冊、今日も一冊と買ひ貯めて、やがて数十冊、大きな木箱に一杯になつた。私はこの数十冊を朝夕飽かず眺めて喜んでゐた。

（『私の読書と人生』要書房、一九四九年）

また、『少年倶楽部』については、佐藤忠男は、『少年の理想主義』の中で、子ども時代に『少年倶楽部』によって「魂を奪われる思いをし、小川未明や坪田譲治にはほとんど退屈以外の何ものをも感じることができなかった」という。

『少年倶楽部』の発行所は大日本雄弁会講談社であった。その社長の野間清治は著書『私の半生』の中で、『少年倶楽部』の刊行については、次のように述べている。

その内容は忠臣孝子、英雄偉人、勇将烈士等の物語に添えて、沢山の色刷り口絵や、美しい挿絵を入れ、その他有名な学者、軍人、政治家等の執筆された面白くて為になる話を工合よく加えた。それは少年雑誌の新しい標準を作ったものであった。

（『私の半生』講談社、一九五九年）

『少年倶楽部』は、少年に「面白く、為になる」ことを方針とし、内容的には、忠臣孝子、英雄偉人、勇将烈士を描くものが多かった。『日本児童文学大系』の解説には、次のようにある。

一九二七年（昭和二年）春の金融恐慌は、第一次世界大戦後の矛盾が、資本主義の弱い環である日本で、まず爆発したものであった。（略）この恐慌のなかで、日本の金融独占資本は、（略）日本資本主義の危機を救う活路として、植民地獲得の侵略戦争を計画し、そのためにも階級闘争の弾圧と国民の反動的教化に、あらゆる手段を惜しまなかった。

こうした支配階級の意図を反映しながら、講談社ジャーナリズムは児童雑誌の王座に位するようになっていた。「おもしろくて、ためになる」というスローガンは、低俗な娯楽性と反動的な教化性を意味し、これで国民のおくれた意識をとらえていたわけである。商業主義的な少年少女雑誌は、明治末年以降、だいたいこのような性格を帯びてきたが、それをあからさまに強くおしだしたことが、競争誌の圧倒に成功したものであった。

（菅忠道『日本児童文学大系③』三一書房、一九五五年）

初期の『少年倶楽部』は篤学な少年を対象とした、立身出世を説く雑誌であったが、大正の末から、戦争を題材とした作品が増え、そして、日中戦争が勃発した後、ついに戦意昂揚のための雑誌となった。『少年倶楽部』の煽情的軍国主義化に対して、『赤い鳥』の中に、同じ戦争や世界時勢を反映するものと言える「世界同盟」という作品がある。大正七（一九一八）年十一月に第一次世界大戦が終了し、大正八（一九一九）年一月にはパリ平和会議が開会されたという時代状況を背景として、大正八（一九一九）年三月号に掲載されたものである。この作品では、子どもたちはそれぞれアメリカ、イギリスなどの国になって同盟を結ぶ。ドイツを除けものにするのは大人の世界のことで、子どもの世界ではみんな仲のいいお友達だから、大国も小国も皆権利は同じだと、皆助け合って楽しく日を送る。当時の国々の間の力関係がはっきり見える（アメリカは背の高い子、日本は小さくて強い子など）が、戦争に抵抗し、平和の理想を子どもに伝えようとする作品である。

児童文学で取り扱う内容については、厳密に規定されていないが、やはり国、人種、階級の差を問わず、世界の平和、人類の幸福のため、正義の味方となら誰とでも仲良くなるし、悪人となら誰とでも戦うといった内容が今日の児童文学で一般的であろう。『赤い鳥』が大正期の児童文学の代表に位置づけられ、一方、『少年倶楽部』が「低俗なもの」のレッテルが貼られた理由は、この基準に従ったからだと考える。しかし、後に反動的な軍国主義の方向になってきたからといって、そのものの全体を否定するのは適当であろうか。『少年倶楽部』という雑誌は、低俗的、反動的なものだけであったとすると、当時熱心に『少年倶楽部』を支持していた十万人の子どもは皆出版社と作家に煽動され、低俗な悪影響をこうむった犠牲者にすぎなかったのであろうか。これはそう簡単に片付けられる問題ではないであろう。

確かに、『赤い鳥』が「芸術」的な児童文学を追求しようとし、文壇諸名家の参加によって、児童文学の質的な向上が実現でき、対世間的な意味における児童文学観を改めさせる契機をつくり、それに、たくさんの名作を残したという貢献は誰も否定できないことである。ただ、『赤い鳥』の価値の決定とともに、それ以外の作家と作品が無視され、抹殺され、大正期児童文学＝『赤い鳥』と誤解してしまう可能性があるので、それを事実に即して、訂正する必要があろう。

おわりに

本稿においては、大正時代の児童文芸雑誌『赤い鳥』を例として、児童文学史で高く評価されている日本創作児童文学の「古典的名

作」の実態を究明することを意図して論をすすめてきた。

「大人が書いて、子どもが読む」のが児童文学であるなら、読者の心をつかめない作品は、決して成功した児童文学とは言えない。そのため、本稿は、大人視線からの作家・作品を中心とした従来の『赤い鳥』研究と違い、『赤い鳥』の読者投書欄を手がかりとして、その読者層、及び読者の享受相を考察してきた。[10] この考察によって、今日の児童文学史が作り上げた『赤い鳥』の虚構の評価から脱して、その「本来の姿」を浮き彫りにした。結論をまとめて言うと、『赤い鳥』の読者は、学校の教師と子どもの親などの大人が大きな比重を占めている。子ども読者もいるが、その範囲はあまり広くないもので、そして、その読書行為には、大人の教育意識の影が色濃くあらわれ、子ども自身が自発的に読む情熱がほとんどなかったのである。言い換えれば、『赤い鳥』は児童文学史で高い評価を獲得した一方で、現実においては、それは、多くの子どもの読書興味を引き出しにくいものだったのである。この意味では、『赤い鳥』の作品は児童文学として失敗したと言っても過言ではないであろう。

「『赤い鳥』の読者の享受相」においては、『赤い鳥』のような、時代の代表と位置づけられ、高く評価されていた児童文学について、児童文学の享受者であるはずの子どもの角度から再検証を行った。しかし、それだけでは十分ではない。さらに一歩進んで、大正時代の子どもたちが『赤い鳥』ではなく、むしろ圧倒的に大衆的児童雑誌に惹きつけられていたという事実があったにもかかわらず、「(『赤い鳥』は…筆者注)ある意味では大正期の中心的な存在であった」(『講座日本児童文学6　日本の児童文学作家1』明治書院、一九七三年)といった評価が、何故『赤い鳥』だけに向けられたか、という理由を究明する必要もある。そこで、次の部分において、この問題について論じてきた。『少年倶楽部』が煽情的軍国主義への道を辿ってしまったのに対して、『赤い鳥』の作品に現われた平等、友愛、寛容のモラルは、国、人種、階級の差を問わず、世界の平和、人類の幸福を基調とした今日の児童文学観と合致していたから、前者が過小評価され、後者が過大評価されたのであろう。

注

① 『赤い鳥』は、一九一八(大七)年七月に創刊、一九二九(昭四)年三月に休刊、一九三一(昭六)年一月に復刊、鈴木三重吉逝去により一九三六(昭十一)年十月に終刊。一九二九(昭四)年三月号を区分点として、第一次『赤い鳥』と第二次『赤い鳥』とよく呼ばれる。本研究は、大正期の児童文学を中心に考察するもので、本稿の調査と研究は、一般的に言われている第一次『赤い鳥』の百二十七冊に基づいたものである。

② 日本児童文学研究の必読文献である菅忠道氏の『日本の児童文学』(大月書店、一九五六年)では、最初に登場する創作児童文学は漣山人の『こがね丸』(一八九一年)としている。同書では、大正期の児童文

学について、「童心文学の開花」を章題とし、「児童文学を市民的感覚と近代的な芸術性によって立てなおそうとする気運は、ようやく熟しつつあった。その気運に方向を与え、新しい児童文学運動としてもりあげたのが、鈴木三重吉の主宰する『赤い鳥』であった。」と始めている。『日本児童文学大系』（三一書房、一九五五年）の第一巻『児童文学の源流』では、『こがね丸』から筆をおこしている。第二巻『童心文学の開花』では、『赤い鳥』をまずとりあげ、同時代のほかの児童文学について触れたのはほんの短い部分だけである。

また、近年の研究では、河原和枝氏の『子ども観の近代―『赤い鳥』と「童心」の理想』（中央公論社、一九九八年）では、「日本で最初に子どものために創作された文学は、巌谷小波の『こがね丸』である。」「お伽噺から童話への展開にもっとも大きな役割を果たした雑誌『赤い鳥』は、大正七（一九一八）年七月、鈴木三重吉によって創刊された。」と書かれている。

③　例えば、「日本の児童文学・児童文化史上に画期的な役割を果たすことになった」（菅忠道「『赤い鳥』の成立と発展」『赤い鳥研究』小峰書店、一九六五年）。そして、「単に児童文学の面で画期的な業績をあげたばかりでなく、ひろく日本児童文化や教育の面におよんで、改新的な意義をもった。日本児童文学史上、お伽噺を克服して、近代的児童文学を現出させ、発展の礎石をきずいた点でながく記憶される」（滑川道夫「『赤い鳥』の児童文学史的位置」『赤い鳥研究』小峰書店、一九六五年）

④　『日本児童文学大系』全六巻（三一書房、一九五五年）は、毎巻の末尾に年代別の解説をつけているが、まず『赤い鳥』をとりあげ、同時代のほかの児童文学についての内容は極めて短いのである。また、『現代日本児童文学傑作選』（講談社、一九八〇年）には、大正期の児童文学三十四篇が収められ、その中には『赤い鳥』の作品が十九篇ある。『日本児童文学名作集』（岩波書店、一九九四年）の中でも、『赤い鳥』初出の作品は、十八篇ある大正期の作品の半数を占めている。

⑤　当時の教育運動の好例として語られる一九二二（大正十一）年に出版された『八大教育主張』（尼子止編、大日本学術協会、一九二二年）に、樋口長市の「自学主義教育」、河野清丸の「自動主義の教育」、手塚岸衛の「自由教育」、千葉命吉の「一切衝動皆満足論」、稲毛金七の「創造教育」、及川平治の「動的教育」、小原国芳の「全人教育」および片上伸の「文芸教育論」が収録されていた。各人の主張は異なっているが、基本的な理念は共通していると言える。

⑥　新中間層とは、日露戦争後における日本資本主義の帝国主義段階への移行期、社会構成の中間部分に新たに登場し、第一次世界大戦後の大正中期以降、本格的に増大し階層形成を始めた社会階層を指す。新中間層は論者により多様な性格規定がなされてきたが、それらを整理した寺出浩司氏の規定に従い、その基本的性格は、①労働形態では頭脳労働、②所得形態では俸給、③社会階級上の位置では資本家と賃労働者の中間、④生活水準の位置では中位、という四点である（『大衆文化事典』弘文社、一九九四年）。

⑦　『赤い鳥』の価格の問題に関しては別稿に譲りたい。

⑧　そのため、当時文壇で活躍する文人「泉鏡花、小山内薫、徳田秋声、高浜虚子、野上豊一郎、野上弥生子、小宮豊隆、有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村、森林太郎、森田草平」其の他十数名の名作家に執筆を依頼し、芸術性の高い児童文学創作を試作してもらった。

⑨　この特集の寄稿者は島崎藤村、小川未明、鈴木三重吉、秋田雨雀の四人で、いずれも『赤い鳥』に作品を寄せれいる。

⑩　本稿において、『赤い鳥』の読者享受相を究明するため、『赤い鳥』の投書欄を分析するという試みを行った。読者の享受相と言えば、読者は、

ある雑誌を読んで、自分の心の中で「おもしろい」「くだらない」と思ったとか、口頭で他の人に勧めたとか、日記で感想文を書いたとか、雑誌へ投書を寄せたとか、種々の複雑な状況が想定されるが、その殆どは、厳密に考察することは出来ないのである。したがって、読者からの投書の分析はもっとも直接的、しかも有効的だと思われる。ただ、投書欄に雑誌編集者の意図が入っていたため、種々の制約があることを無視してはならない。

今回は、大人が書いた幼年時代の読書回想などの資料を使うことにより、投書分析の限界性を補うことにした。

〔付記〕

引用に際して、旧漢字は原則として新漢字に直した。

なお本稿は、二〇〇八年度春季同志社大学国文学会研究発表会（二〇〇八年六月二十二日、於同志社大学寧静館）における口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重な御指導や御教示を賜りました方々に、改めて心より御礼を申し上げます。